



国際化の最前線から



インバウンドと「やさしい日本語」

東海大学国際教育センター 加藤 好崇

落人伝説の祖谷と日本語

「いっちゃん、コミュニケーションがとれるのは御当地弁で自分の思いを自分のことばでしゃべること」。こう話すのは外国人客が急増する徳島の秘境祖谷でそば打ち工房を営むTさん。壁の世界地図には客の出身国がピン留めされている。Tさんのことばは「外国人＝英語」と思い込んでいる我々に日本語の役割を再認識させてくれる。とは言え、これはそば打ち体験という目的が明確な場面でのこと。他の場面で日本語は役に立つのであろうか。

ホストとゲストのための日本語

そんな場合でも役に立つのが「やさしい日本語」である。「やさしい日本語」は阪神淡路大震災をきっかけとして生まれた外国人のための防災・減災を目的とした日本語だ。これには敬語の不使用、1文につき1つの情報、和語使用など、一定のルールがある。

このやさしい日本語がインバウンドで使われる場合、2つの効果が期待できる。

1つは外国人ゲストに対するもの。現在世界には約385万人の日本語学習者がいる。この人たちが日本語を

使って日本旅行をしたいと感じるのは自然なこと。ただし、ほとんどが日本語初級者であるので日本人同士の日本語では理解できず、やさしい日本語が適切となる。

もう1つの効果は日本人ホストに対してのもの。以前、インバウンドで盛り上がる渋温泉のあるそば屋に入ったことがある。ここでは外国人客に「We speak only Japanese, sorry.」と書かれた英語のメニューを渡し、同時に女将さんはやさしい日本語を使う。この試みで女将さんは「肩の荷が下りた」と言う。つまり、外国人とのコミュニケーションの壁が低くなったわけだ。日本語を使ってはいけない、英語を使わなければならないという束縛から解放されたのである。

談話と行政を往還する日本語

上述の内容はすべて個人の談話上の話である。すべてのコミュニケーション問題やその解決は個人の談話で生起する。やさしい日本語は1つの問題解決の方法なのだが、この方法を多くの人に伝えるためには行政からの働きかけも必要になる。ある地方自治体の職員がこの談話と行政を結びつける役目を担い、市民向けにやさしい日本語講座を開催した。しかし、その自治体全体がインバウンドのためのコミュニケーションに積極的に関心を払うのにはまだ時間がかかりそうだ。談話から発生したやさしい日本語が行政に取り込まれ、やがてより多くの人々の談話に環流していつてもらいたい。



そば打ち体験工房の壁に貼られた世界地図

プロフィール

加藤 好崇 (かとうよしたか)
東海大学国際教育センター教授。日本語教育学博士、専門は日本語教育学、社会言語学。主な著書に『「やさしい日本語」で観光客を迎えよう』(大修館書店)、『やさしい日本語とやさしい英語でおもてなし』(研究社)、『異文化接触場面のインターアクション』(東海大学出版会) などがある。